日本医学のあゆみ

宗田　一

わが国の医学の流れを、外来医学受容と、それぞれの時期における日本化の視点でとらえると、表一に示すような枠組みになろう。

外来医学の最初の受容は、東亜文化圏の医学としての韓医方（七世紀）である。それは仏教文化とともに齎らされた。僧医や看病僧の出現とともに、仏教礼拝が病苦に結びつき、初期の仏教寺院建立は、〝除病延命〟のためであった。『薬師寺縁起』にみられるのはその一例である。

新来の医術・医人（薬師）に対する信頼は、薬師寺の仏足跡歌碑文に、「クスリシ（薬師）は、常のもあれど、まらびと（外来の人）の、今のクスリシ、尊とかりけり」とあるのでもうかがわれる。

八世紀以降は、中国大陸から直接に新医学を導入・受容した。漢代に体系化された中国医学の発展期にあたる隋唐医学の受容にはじまり、宋・明・金元医学と続く。

古代日本の名族を記した『新撰姓氏録』には、総姓氏数一一八二氏中渡来系四一三氏（三〇％）が占め、半島系渡来人の氏族は二〇％強に達する。八世紀の内薬司と典薬寮の医官の約七〇％は、渡来人系氏族で占められる。

半島系渡来人の主な医薬関係事蹟を挙げると、表二に示す通りで、難波薬師のように代々医療職を世襲し、その子孫の

表 1

外来医学の受容

THE ACCEPTANCE OF FOREIGN MEDICINE

導入時代 AGE OF INTRODUCTION	主な医学 MAIN CURRENT	導入先 FROM	導入形式 MODE OF INTRODUCTION	医学の日本化 JAPANIZATION OF STUDY OF MEDICINE
1 7世紀（飛鳥時代） The 7 th Century(Asuka-era)	韓医方 Korean Medicine	朝鮮半島 Korean Peninsula	国家間朝貢 Tributes among Dynasties	10世紀（平安時代） 丹波康頼（たんばやすより）「医心方」 The 10 th Century (Heian-era) TANBA no Yasuyori "Ishinho" (The oldest remaining medical book)
2 8世紀（奈良時代） The 8 th Century(Nara-era)	隋・唐医学 Sui・Táng Mediene	中国大陸 China Continent		
3 13世紀（鎌倉時代） The 13 th Century(Kamakura-era)	宋医学 Sung Medicine		民間通交 Private Foreign Trade	
4 15世紀（室町時代） The 15 th Century(Muromachi-era)	明医学 Ming Medicine			16世紀（安土桃山時代） 曲直瀬道三（まなせどうさん）「啓迪集」 The 16th Century (Azuchi・momoyama-era) MANASE Dōsan "Keiteki-Shū"
5 16世紀（安土桃山時代） The 16 th Century (Azuchi-momoyama-era)	金・元医学 Chin・Yuan Medicine			
6 16世紀 The 16 th Century	南蛮医学 Spanish-Protuguese Medicine	欧州南部 South Europe	幕府通交 The Shogunate Trade	17世紀（江戸時代―鎖国期） 古医方派（名古屋玄医・後藤艮山ら） The 17th Century(Edo-era, The Age of National Isolation) koihō-school (NAGOYA Gen'i, GOTŌ, konzan, et al.)
7 17世紀（江戸時代―鎖国期） The 17 th Century (Edo-era, The Age of National Isolation)	紅毛医学 Dutch Medicine	オランダ Holland		
8 19世紀（江戸時代―開国期） The 19 th Century (Edo-era, The Age of Opening to Foreign Intercourse)	英米語系医学 Anglo-American Medicine	欧　米 Europe and U.S.A.		
9 19世紀（明治時代） The 19 th Century (Meiji-era)	ドイツ語系医学 German Medicine	欧　州 Europe	官学主導 Leadership by The Governmental Schools	
10 20世紀（第二次世界大戦後） The 20th Century (After the Second World War)	アメリカ系医学 American Medicine	米　国 United States of America		

表 2

	西紀	人名	記事
垂仁朝		新羅人の子・田道間守	海外派遣・求有用果樹
允恭朝	440～50？	新羅医	治天皇疾病
雄略朝		百済医・徳来	子孫代々称難波薬師
欽明朝	553～4	医博士	韓半島医薬学盛行
欽明朝	564	呉人・知聰	自高麗医薬書・薬臼
推古朝	602	百済僧・勧勒	医薬学教育
推古朝	623	徳来子孫・恵日	自唐留学帰国
孝徳朝	645	知聰子・善那（福常）	献牛乳（薬餌），賜姓和薬使主
天智朝	671	韓半島系解薬者（炑日比子等）	受爵
天武朝	675	韓半島系医人	献屠蘇酒
天武朝	685	百済僧	白朮煎
聖武朝	732	物部韓国広足	典薬頭
仁明朝	834	百済人子孫蜂田薬師文主	賜姓深根宿弥

中には中国大陸へ留学派遣される者も出ており、また物部韓国広足（モノノベノカラクニノヒロタリ）は典薬頭（クスリノツカサ）（医官最高位）、難波薬師奈良（ナニワクスシノナラ）は内薬正（ウチノクスリノカミ）（医官第二位）といった律令制下の医療職の高位に登用される人物もおり、中国系渡来人の場合も同様だった。

十世紀（平安時代）は、外来文化導入の担い手だった遣唐使の派遣が中絶し、それまでに蓄積された学問・文化の日本化がはじまる。

『日本国見在書目録』（八九八年頃成稿）には、一六六部一三〇九巻に及ぶ中国・韓医薬書がみえ、それら舶載された医薬書を活用して医薬書の編さんが、この期にみられる。現存最古の医書『医心方』もその一つで、中国系渡来人を祖とする針博士・丹波康頼（タンバノヤスヨリ）によって撰述されたこの書も、この時代背景から生れ、それまでに蓄積した中国医学の消化吸収の上に立って、医学の日本化をはかろうとしたものだった。

古代律令制下の医療の対象は、支配階級とそれに従属する官僚群であって、庶民の医療にまで及んでいない。その欠を埋める救療施設として施薬院・悲田院・療病院などがあっても、中央に限定される。

十三世紀（鎌倉時代）は、古代律令制の崩壊によって、官禄から

あぶれた医師の自活を促し開業医が出現する時代であり、また医療制度・政策の不備を補完する僧医の社会救療活動の高まった時代であった。

十四世紀（南北朝時代）の戦乱が要求した医療の分化は、外科（金創）の独立となり、この金創医から女科（産科）、さらに小児科（啞科）が出現、眼科もこの期に専門化した。

このような専門分科の出現は、室町幕府が医官の幕府内への引き止め策や、すぐれた民間医の登用のため実施した僧官僧位の医師への転用によって、幕府の医官層が厚くなった結果、技術の分化を促進した点も見逃せない。

次の日本化の画期として、十六世紀（安土桃山時代）に曲直瀬道三による金元医学の日本化がある。こうして、中国系医学の日本的新展開がはじまった。

一方、この時期には、西欧文化圏の医学の受容という新しい途が開かれた。西欧世界の飛躍的膨張（大航海時代）によって西欧文化と接することになったためである。その文化の担い手は、キリスト教の教化力を利用して植民地政策を推進するために派遣された宣教師で、いわゆるキリシタン医療が導入され、当時のわが国庶民医療の空白を埋め信頼を集めた。しかし為政者によるキリシタン弾圧で、あえなく消え去り、それに代って布教に無関係の外国人医師や海外帰りの日本人医師による洋方医術が導入され、戦国時代の乱世に、その外科技術が旧来の医学の欠を埋めるものとして、南蛮流外科の名で定着した。

鎖国下に入った十七世紀には、洋方医学の担い手をオランダ一国に代え、紅毛・オランダ流外科の受容となる。こうした洋方医術の受容の中から通詞系医師が育ち、やがて洋書を本格的に読み、本格的翻訳へと進む医師層が出現して、本格的洋方医学（蘭方医学）の受容が開始される。

この間にあって、さきに日本化された中国系医学は、分派・乱立・屋上屋を重ねる理論で行詰りをみせるようになった。そのアンチテーゼとして、臨床に役立たぬそれら医学理論を否定し、経験・実証主義を医学に導入しようとする機運

が高まり、古方派（古医方）が生まれる。

日本独自の展開を示した古方派は、親験実試による人体解剖から中国内景説の否定につながる一方、臨床の場で実効のある治法の探究へと進み、その中から洋方の術をも取り込む漢蘭折衷派も出現した。

しかし、ややもすれば古典を恣意的に解釈する古方派の行過ぎに対するアンチテーゼとして、十九世紀に考証学派が出現、古典の徹底的考証・校勘・復原という基礎作業を通じ、中国系医学の客観的再検討を行う方向が打ち出された。その中心が「江戸医学」（江戸医学館を拠点とする学派）の人びとで、『医心方』校刻・刊行事業も、それらの人びとによって断行された。表一には掲げなかったが、この考証学派の業績も、医学の日本化としてよい。考証学派の業績は、その活躍期のあとに迎えた明治政府の近代化＝西欧化路線政策によって、十分な評価と活用の機を逸し、埋れてしまった。

医心方撰進一千年の記念すべき年を迎えた機会に、新しい医学の建設のためにも、「江戸医学」校刻（安政版）『医心方』の刊行によって、幕末期の最後を飾りながら埋れてしまった考証学派を、正しく位置付けする必要がある。

The Development of Medicine in Japan

by
Hajime SODA

In this paper, I have examined the development of medicine in Japan from the view point of its incorporation and adaptation of foreign medicine.

The inpact of foreign medicine in Japan differs according to era the country of origin and the manner in which the foreign learning was introduced. The aim of this paper has been to show that

the incorporation of foreign medicine occurred primarily during the 10 th, 16 th, 17 th and the first half of the 19 th centuries and to discuss its implications.